

## 鶴岡市における活着期追肥の検証

有賀 和裕

【背景と目的】水稲の初期茎数と穂数との間には正の相関関係が認められることより、初期茎数を増加させることが重要である。鶴岡市では圃場間で水稲の初期茎数が変動し、穂数の安定的な確保が難しいことが問題となっている。基肥の一部を活着期にあたる移植後5~7日に表層施肥する活着期追肥（以下、活着肥とする）は初期茎数を増加させるための一手段として行なわれている。しかし、鶴岡市で活着肥が普及した当時と現在の主要品種、気象条件が変化している。また、気象、土壌条件が異なる鶴岡市の各地区で、活着肥が初期茎数を増加させるかどうかは明らかにされていない。以上のことから、鶴岡市の水田における活着肥が水稲初期茎数に与える影響を検証することを目的とした。【材料と方法】供試品種：はえぬき。供試圃場：鶴岡市の7圃場（新形、清水新田、水沢、井岡、高坂、桂荒俣、工藤）。栽培方法：圃場内に埋設した木枠（縦30cm、横15cm、高さ15cm）に葉齢3.9の苗を移植。移植日：5月23日。施肥日：基肥5月22日、活着肥5月28日。基肥量：慣行区 N、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>、K<sub>2</sub>O を各 6g/m<sup>2</sup>、活着肥区 N、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>、K<sub>2</sub>O を各 4、6、6g/m<sup>2</sup>。活着肥量：N を 2g/m<sup>2</sup>。測定項目：茎数（移植後20日）、気温（移植後0~20日間）、土壌のCEC。【結果】①移植後20日間の日平均気温は圃場間で最大0.9℃の差があった。②各圃場における慣行区の茎数と活着肥区の茎数との間に有意な差は生じなかった。（図1）③各圃場の活着肥区の平均茎数から慣行施肥区の平均茎数を差し引いて得られた値は-0.3~3であり、この値とCECの間には有意な正の相関関係が認められた。以上のことから、本年の気象条件下ではいずれの供試圃場でも活着肥は初期茎数を増加させなかった。しかし、土壌のCECが高い圃場では活着肥により初期茎数を増加させる可能性があった。

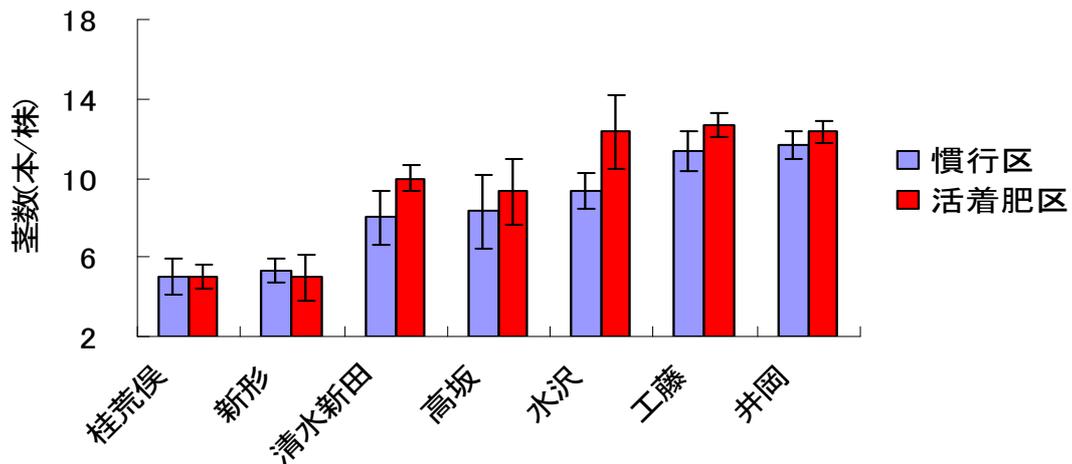


図1、各圃場における慣行区の茎数と活着肥区の茎数